



大漂流 怒りの大洋 第三部
田中光二
双葉社
(3/10刊・¥850)

『怒りの大洋』『大海神』に続く、海洋三部作の完結編が本書。前二作が、沖勇魚を主人公にしていたのに対し、『大漂流』はその息子、洋人の物語である。

二十一世紀、巨大な洋上浮遊都市『ボセイドニア』は、ユダヤ人たちの建設した、第二のイスラエルだった。だが、その都市に、パレスチナ・ゲリラの影が忍び寄る。洋人たち、水中救助チームは、都市の防衛を要請される。海こそは、外宇宙より興味深い内宇宙——とは、作者の弁である。今でも、海を舞台にしたSFは、ヴェルヌ以来、クラークの『海底牧場』や『イルカの島』など、あるようであり、意外に少ないものだ。

本編も、その数少ない海洋SFを目指している。各構成区画を連結し合った、平面状のハチの巣——太平洋の潮流に乗って、回遊する、五万人の住む海上都市は、それ自体のイメージで、小説一本分の背景を支えてくれるだろう。

ただせつかくの設定なのだから、パレスチナ・ゲリラとの『サンダーボール作戦』風のアクションシーンなど、いまひとつひねりがほしかったように思う。(俊)